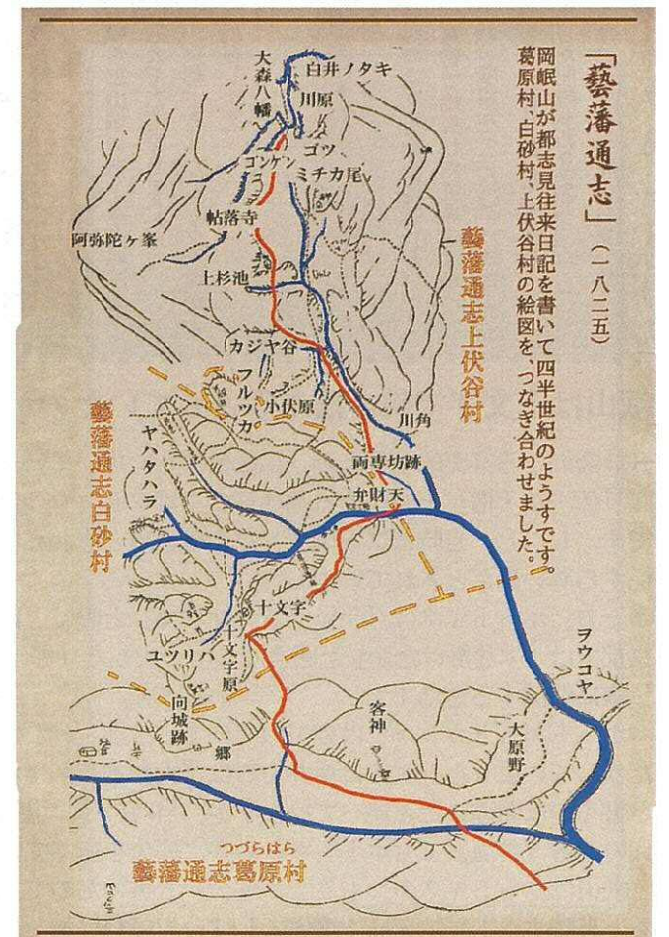


広島藩のお抱え絵師
岡岷山の描いた江戸時代の十文字周辺を歩く

江戸時代、第十七代藩主浅野重晟(しげあきら)公にお抱え絵師としてお傍で仕えた岡岷山(みんざん)は、都志見(つしみ)の駒が瀧まで写生の旅にでました。寛政九年八月二十三日(一七九七年十月中旬)、岷山六十四歳の事です。目的地は北広島町の豊平ですが、わざわざ遠回りして湯来を経由し、十二景の風景面を残しています。全行程で描いた三十七景の三分の一を湯来で描いたことになり、藩主重晟公が尊敬する祖父の吉長(よしなが)公が整備した湯の山温泉のある湯来は目的地のひとつだったでしょう。広島を発った岷山は、八幡川を遡り、河内峠を越えて向原から葛原(つづらはら)に入ります。客人神社のそばを通過して十文字を過ぎ、小伏原の庄屋の家に到着しますが、途中で寝ていて十文字の絵を描きそびれました。殿様に提出した旅行報告書『都志未往来日記』に「風景、写すべしと思いに、駕籠に眠りて行過ぎ、そのこと空しくなりぬ」と正直に書いています。岷山は十文字でどのような絵を描こうとしていたのでしょうか。



「江戸ゆきツアー」のコース

「江戸ゆきツアー」では、岡岷山がたどった行程を五つに分けて、それぞれ半日のコースとして設定しています。二時間の短縮コースもあるので、スケジュールや体力に応じて選択してください。



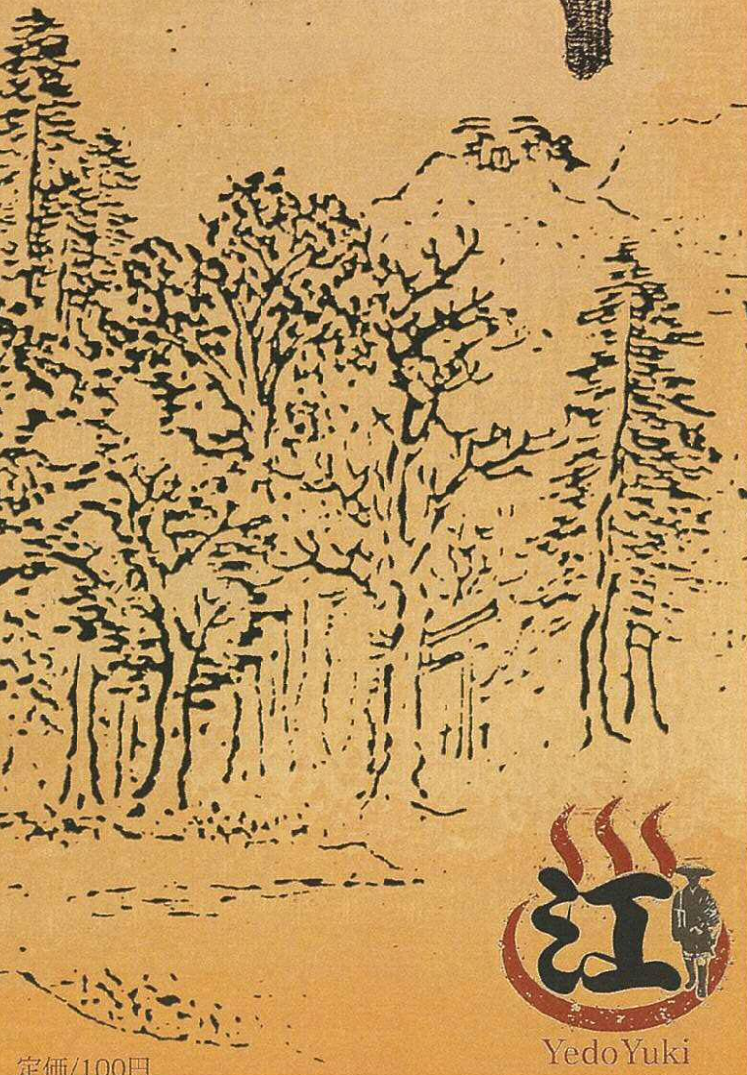
【発行・お問い合わせ】
「江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみようプロジェクト」
NPO法人湯来観光地域づくり公社
広島市佐伯区湯来町大字多田2545
TEL 0829-85-0670
HP: <http://e-yuki.net> 「となりの里山」

十文字コース編

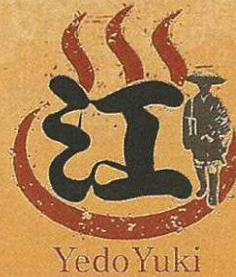
江戸の湯来を歩く

当時の街道は今とは違い十文字を通過していません。旅人にはどんな景色が見えたのでしょうか。古道を歩いて想像してみませんか。

天狗峠から



定価/100円



「江戸の湯来を歩く」江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみよう

「ほんとうの十文字は、あの三叉路の場所ですよ」
写真を撮っていると、近所の方が教えてくれました。
「ほら、畑の中にも小道があって十文字路になっているんですよ」
古い街道の歴史を知りたくて、調べていたことでした。
私たちが古道の調査に使った資料は、「芸藩通志(二八二五年)の絵図、岡岷山の「都志見往来日記」と「都志見往来諸勝図」(一七九七年)、さらに明治時代の地図や、このような地元での聞き取りなどです。こうして調べた五コースの古道のパンフレットを作成しました。十文字コースは、五日市方面から湯来に入って最初の部分です。さあ、このパンフレットを片手に、湯来地区の古道をのんびり歩いてみてください。



江戸の湯来を歩く

十文字コース 半日・2時間コース

十文字コースには、久下向原(1)と客人神社(2)、十文字(3)、庄屋敷跡(4)、大森神社(5)など見どころがたくさんあります。コースが南北に長いので、出発点まで戻すためには、路線バスを利用したほうが便利です。(バスの便が少ないので乗り遅れないように時間に注意してください)

もよりのバス停

- ①「久下向原」 ↓ 白川
- ②「客入神社」 ↓ 杉並台団地口
- ③「十文字」 ↓ 砂谷中学校
- ④「大森神社」 ↓ 大森



2時間コース (白川バス停)

- ① 久下向原
 - ② 客人神社
 - ③ 十文字
 - ④ そうはぎ
- (杉並台団地口バス停)

五 西専坊跡

藝文志には、西専坊跡から上伏谷村になって、今は弁財天があると書いてあります。絵図によると、現在の砂谷中学校の西にあたるようです。この付近に川角橋があったようで、八幡川を渡って、すぐにまた小さな橋を渡ると西専坊跡になります。上伏谷村に入ったことは、岷山は書いていません。これも眠っていたのでしょうか。

一 久下向原

(ひさげ むかいほし)
八幡川の北側が久下、南が向原です。西南から木末川が合流しています。

「河内峠を降りて来て流れを右手に見て進むと、樹木が茂り、陰鬱で寒々しい場所に出る。

道のほとりには、カトウ蘭が雪が降ったように美しく咲いている。

「ここから葛原(つづらはら)村に入る」

二つの川が合流する地点の西側で木末川を渡りました。

道のほとりに咲いていたカトウ蘭がどの植物を指すのか不明ですが、岷山が旅行した十月中旬の水辺には、白いナメライモンシソウが咲くので、それかも知れません。

二 客人神社

(まろうち)

岷山は「客大明神」と書いています。「客」だけでも「まろうち」と読んだのでしょうか。

客人神社は殿島の神が立ち寄った場所。以前は山の中腹にあつたと伝えています。

大イチョウが有名ですが、岷山が来たときは紅葉には少し早かったと思います。

このあと、十文字に向かってかしお谷を登ります。



三 十文字

このあたりで岷山は駕籠の中で寝てしまったようです。

「この郭公(ホトトギス)は鳴き声がようずで、俗にいうように『ホソノカケタカ』というのが、はつきり聞こえたりと或る人がいつていた。

今は郭公の鳴く時期を過ぎているが、鳴き声は聞こえなくとも、十文字あたりの風景を写生しようと思っていた。

しかし駕籠の中で眠って行き過ぎてしまい絵を描くことができなかった」
日記の文章です。

四 そうはぎ

十文字から杉並台団地に越す小さな峠です。追いはぎが出たからとも言われますが、ソウハギは、お盆に供える風習のあるミソハギの異名です。峠付近には湧水があるので水分を好むミソハギが自生していたのでしょうか。

岷山はこのあたりでいちど目覚めたとき「峠に着いても見通しは良くない」と書いています。

六 川角城跡

湯来南小学校の裏に川角城がありました。今の内神社あたりです。城主とかの詳細は不明です。

八 大通寺

阿弥陀山にあった寂光院観音堂にはじまります。

武田氏の時代には銀山城の背後にある長楽寺に対して、奥の長楽寺と呼ばれていました。毛利元就が武田を滅ぼしたのち郡山城にあった大通院を迎えて大通寺としました。

京都で作ったという大鐘が現存します。

九 大森神社

名前のように大きな森でした。

落雷で焼失した殿島の大鳥居を、享和元(一八〇一)年に修復した際に用材として伐り出した記録もあります。社叢は平成三年の台風で壊滅しました。

七 庄屋跡

岷山が最初の日に宿泊した庄屋甚九郎は、複数の庄屋を束ねる「割庄屋」でした。

公用の旅では、庄屋敷を藩が接取して宿泊所とするのが慣例でした。

甚九郎の先祖は道後から移住してきた河野氏で、姓は竹内、代々の当主は甚九郎を襲名していました。

岷山はここで一泊しましたが、寒かったようです。

「みんな綿人の着物を着て、火鉢やいろりにあたって寒さをしのいでいる。『今日は特に寒いのか』とたずねると、『今日は、いつもより、あたたかい方です』という」
日記にはそう書いています。



阿弥陀ヶ峯
天狗懸掛杉
大森
此奥二白井瀧アリ

岷山は十文字で何を描こうとしていたのか?

33歳のころ写実的な花鳥画「仏法僧図」を描いています。「仏・法・僧」と聞こえる鳴き声の主はフクロウの仲間のコノハヅクです。しかし、当時はブッポウソウの鳴き声と思われていて、仏様に関係する尊い鳥だとされていました。一方、ホトトギスは「テッペンカケタカ」と鳴くといいますが、京都では「本尊掛けたか」と聞きなしていました(古今要覧稿)。これも仏様に関係する霊鳥です。ホトトギスとカッコウは姿が似ていて、区別されなかつたり混同されたりしていました。すでに新井白石は『大和本草』でホトトギスを郭公と書くのは間違いだと述べていますが、当時の『早引節用集』や明治時代の辞書『言海』でもホトトギスの字に郭公を宛てています。岷山はホトトギスのつもりで「郭公」と書いたのでしょうか。もしかすると当時ホトトギスを描く準備をしていて棲む場所を見たいと思ったのかも知れませんね。